

ルツェルン音楽祭が開催

今年も開催が危ぶまれていたが、早い時点で上限1000人の聴衆でも確実に開催できる方向へ舵を切った甲斐もあり、8月10日、無事にルツェルン音楽祭が021が開幕した。今年のテーマは「クレイジー」。いまの世界をビッタリ言い当てたタイトルだ。

祝祭音楽団の演奏会第1日は、KKL（ルツェルン・カルチャー・コンダレスセンター）からのライブ中継をオーブンエアの巨大スクリーンで無料視聴できるのだが、今年は先着500人限定だった。そのほか、国営ラジオやテレビでも放映された。モーツァルト「歌劇《ドン・ジョヴァンニ》序曲」と「交響曲第40番」、そしてシューベルト「交響曲第6番」を、奇をてらわず上品にまとめた。

翌日はシューベルトのみシューマン「ピアノ協奏曲」に代わり、ソリストにイゴール・レヴィットを招いたが、彼のピアノの音色は最初のいくつかの和音だけで聴衆の心を掴んだ。オーボエと対話しながら楽しそうにオーケストラと交わり、全体のハーモニーを最優先に組み立てた演奏だった。8月19日、ヤニック・ネゼセガンの病欠が発表されたため、21日はピアノ協奏曲をソリストのユジャ・ワンが、交響曲はコンサートマスターが弾き振りし、「指揮者なしでもすばらしい演奏だった」と、驚きを持って聴衆に受け入れられていた。24日はヤクブ・フルシヤが代役を務めた。

バルトリ登場

8月22日昼はチェチーリア・バルトリが、おなじみのジャンルカ・カプアーノ率いるモノナコ大音楽隊と共に、カウンター



ベルゴレージ《スターバト・マーテル》ほかを演奏したルツェルン音楽祭のバルトリのコンサートから。左からバルトリ、カプアーノ、ヴィストーリ
©Peter Fischli / Lucerne Festival

テナーのカルロ・ヴィストーリを招いて登場した。まずはヴィストーリがヴィヴァルディのモテット《煌めけ、明るい星々よ》を小ぶりな声で、しかし精緻に歌った。続くモテット《公正なる怒りの激しさに》はバルトリの出番だが、横隔膜の使いかたが微妙に鈍い。そのせいでコロラトゥーラも、彼女にしては苦労して声の焦点を集めている感じだ。そして安定感のある息の支えも感じられない。2曲目のアリアになってようやく余裕が出てきた。

そのあとはジャン・マルク・グージョンのソロによるヴィヴァルディ「フルート協奏曲《夜》」（リコーダーと弦楽隊、通奏低音のための協奏曲）を挟んで、ベルゴレージ《スターバト・マーテル》では、初め二人の声がうまく調和しなかったが、そのうち周波数が合ってきた。すると最初に声量が

ないという印象を与えたヴィストーリですら、ところどころで声飛び出してしまう。彼はバルトリに合わせるために、最初の曲から絞った声を作っていたのだ。バルトリも第5曲の二重唱（キリストの御母の）から本領を発揮、第6曲《聖母はまた最愛の御子が》でようやく声のフォーカスが当たるようになり、美しい弱声を聴かせた。最終曲（肉身は死して朽つるとも）ではオーケストラも最弱音に挑戦し、消え入るように絞ったフレーズから最後の「アーメン・コーラス」に突入した。アンコールではヴィヴァルディに戻り、バルトリとフルートのグージョンが《狂乱のオルランド》から（ただ君によつ

てのみ、わたしの優しき愛の女よ）を好演、ヴィストーリは《主が家を建てられるのでなければ》をのびのびと歌い、最後は前述の「アーメン・コーラス」のJ・S・バッハ編曲版を全員で聴かせた。

ザンデルリンクが好演

夜はルツェルン交響楽団が新首席指揮者のミヒヤエル・ザンデルリンクの指揮でウエーバー《魔弾の射手》序曲、ステイヴン・イツサーリスをソリストに迎えたシューマン「チェロ協奏曲」と「交響曲第4番」を演奏した。就任前からの関係構築している当楽団とザンデルリンクだが、《魔弾の射手》はゆっくりのテンポで緊張感が足らず、フレージングも感じられない。音楽が劇的效果を描き出す部分では、いやおうなしに盛り上がったのだが、最終

部分も軽すぎで終わってしまった。イツサーリスのチェロは甘い。でも今宵はなぜか、雑な部分もあったように感じられた。夢見心地の音と押し出しのない音が共存している。しかし歌心は貫き、チェリストでもあるM・ザンデルリンクは存在感も感じさせないほどオーケストラをソロに沿わせ、集中力のある協奏曲に仕上がっていた。

シューマンの交響曲はウエーバーとは違って、緻密に組み立てられていた。クライマックスに達したときに緊張感を持続させてほしいが、それ以外は好演だった。楽団員との関係も微笑ましく、これからの当楽団が楽しみだ。

ルツェルン音楽祭後半については次号にも続けてレポートするが、アンネゾフィー・ムターほか3人が新しくルツェルン音楽祭評議員会に名を連ねると発表された。ムターは1976年に当音楽祭で世界的キャリアをスタートさせ、翌年にはヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮したベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とザルツブルク音楽祭にデビューしている。

ヴェルビエ音楽祭で藤田真央が活躍

その他、ヴェルビエ音楽祭では藤田真央がモーツァルトのピアノ・ソナタ全曲演奏に挑んだ。藤田は2018年にアカデミー参加、昨年は「ヴァーチャル・ヴェルビエ音楽祭」にも出演している。今年7月19日に「第3、4、5、14、10番」、20日に「第7、13、1、12番」、23日に「第11、2、15番」、28日に「第6、8、16番」、そして30日には彼が好きだという「第9、17、18番」を弾ききった。